

二〇二五年三月二八日

春泥の長靴逆さ干す飯場  
首塚にぬかづきをれば揚雲雀  
通勤の朝の里路に初音聞く  
木の芽時なれば昼餉は庭椅子で

山椒  
明日香  
むべ  
よし女

二〇二五年三月二七日

蛇行してつづく菜の花堤かな  
横断歩道渡る訓練入園児

むべ  
千鶴

二〇二五年三月二六日

初蝶と会ふ里バスの停留所  
黄砂降る平安京も幻に

あひる  
もとこ

二〇二五年三月二五日

足先のはみ出してをる春炬燵  
白魚の跳ねて綺羅散る四つ手網  
初蝶と抜きつ抜かれつ野路樂し

康子  
たか子  
あひる

二〇二五年三月二四日

茎立の葉牡丹のこす一末社  
明日香川春を集めて高鳴りぬ  
病室やはばかるほどに咳止まず  
里山路ゆけば鶯本調子  
うららかや埴輪もおしやべりしたそうに  
つくばいの水面掃きゐる柳の芽

なつき  
明日香  
董雨  
こすもす  
千鶴  
愛正

二〇二五年三月二三日

古い母に草の名習ひ野に遊ぶ  
この道はかつて畦道つくづくし  
古街や店先ごとに雛飾る  
青空をしとね水面の落椿  
踏青や母の歩幅の狭くなり  
子と並び漕ぐふらここに風優し

康子  
むべ  
山椒  
あひる  
康子  
みきえ

二〇二五年三月二二日

お彼岸の供花に華やぐ墓苑かな  
大千瀉タンカー沖に遠ざけて  
船うらら真一文字に白き水脈

はく子  
みきお  
せつ子

毎日句会みのる選・二〇二五年三月三〇日